

ヌスやトマス・アクイナスも言及しているものであるが、この作品では、この両者からの引用でもってこの種の悪魔の存在や行う悪事を現実のものであると断定している。

ここでは、キリスト教の浸透と共に異教の神々が悪魔と混同ないし融合していったことがうかがえる。

以上のように、『鉄槌』では、キリスト教の伝統に基づきながらも、新しい悪魔観も提示している。また、キリスト教が浸透したと考えられていた一五世紀のヨーロッパにおいて、依然として古来より続く民間信仰や異教の神々への信仰が残存していたということが『鉄槌』を通して見えてくるのではないだろうか。そして、それらの神々は聖職者によって悪魔に姿を変えられ、魔女と結びつけられた。

市民宗教再考

—— 一九世紀フランスの思想家たちに即して ——

伊達 聖伸

「市民宗教」という言葉は奇妙な運命をたどってきた。新しい政治秩序を支えるのはいかなる宗教であるべきか。ルソーが『社会契約論』で提起したこの問いは、一九世紀フランスにおいて本質的な問いであり続けた。ところが、当時の著者たちは「市民宗教」という言葉をほとんど用いていない。それでもこの言葉は、近代の宗教的側面を記述するための操作概念として、研究者の共通理解ができていないまま、現在でも用いられている。

本発表では、コント、トクヴィル、デュルケムという、フラ

ンス一九世紀の三人の「社会学者」に注目し、彼らの宗教論をルソーの市民宗教と比較検討する。

ルソーの市民宗教は第一に、反カトリック的である。ルソーが「司祭の宗教」を批判するとき念頭に浮かべているのは「ローマのキリスト教」で、これは人びとに「二つの法体系、二つの首長、二つの祖国」を与え、「社会的統一性」を破壊する。第二の特徴は、内的な信仰と外的な礼拝のあいだに分裂ないし齟齬を認める点である。第三に、ルソーは政治と宗教の一致を目指している。第四の特徴は、寛容の逆説にかかわる。ルソー自身は、不寛容な「市民の宗教」と寛容な「市民宗教」を区別しようとしたが、主権者は市民宗教の信仰箇条を信じない者は誰であつても国家から追放することができるとされており、市民宗教のイメージは、ルソー自身が批判した排他的な国家宗教のイメージに連なりうる。

コントの人類教は、ルソーの市民宗教の一変種であるという見方がある。しかし、コントとルソーでは、一元性と二元性の配分がほとんど正反対である。たしかにコントは、人間の存在を個人的側面から扱ったり集団的側面から扱ったりすることはあるが、人類教が想定しているのは調和であつて、ルソーのように公と私のあいだに断絶を見ていない。ルソーの市民宗教は、政治と宗教を一致させようとする点において一元的だが、コントはまさにこの一致こそ弊害をもたらすものだとし、世俗的権力と精神的権力の分離を説く。

トクヴィルがルソーを熟読していたことは知られているが、ルソーが政治と宗教の合一を唱えるのに対し、トクヴィルは両

者の分離を主張する。ただしトクヴィルは、宗教を私事化して影響力を小さくしようとしているのではなく、宗教の自己限定を通して、民主主義の時代における宗教の機能を効果的にしようとしている。また、ルソーにとってカトリックは反社会的で、共和主義的な政治にとって害をなすとされるものだが、トクヴィルから見たカトリックは、社会的に有用なものである。

コントやトクヴィルが属していた時代は、宗教批判の時代ではあっても、宗教の社会的有用性については基本的に疑問符がつかない時代であった。デュルケムは、宗教の社会的有用性が自明ではなくなりつつあった時代において、社会的なものと宗教的なものの本質的な同質性を改めて取りあげた。デュルケムから見ると、ルソーの「自然」は社会の外部として現われる。

ところでデュルケムの企てとは、まさにこの外部を取り除くことにあった。またデュルケムは、個人と国家のあいだに一連の中間集団を挿入することを提案し、ジャコバン・モデルを相対化している。ただしデュルケムは、近代国家が同業組合から個人を解放する役割を演じることを踏まえている点では、ルソーに近づく。また、モナ・オズーフが指摘するように、デュルケムの集合沸騰論と、祭りにおける人びとの一体感を語るルソーの議論をつなげることも可能だと思われる。

市民宗教の問題は、それまで他律の回路によって政治権力を正当化していた社会が自律化し、新たな社会的紐帯の構築という課題を前にするとき最も先鋭化する。本発表で取りあげた論者はみなこの問題を共有していたが、やはり各論者のニュアンスは異なっている。

一九世紀アメリカ合衆国の健康と宗教実践

佐藤 清子

本発表においては、十九世紀前半のアメリカ合衆国の健康／宗教論を取りあげ、それらがプロテスタントのアメリカ人に新たな生活上の実践をもたらすとともに、非プロテスタント的な宗教実践を、「不健康な習慣」としてより一層異化しようとしたことを示した。

十九世紀前半は、病氣そのものや、病氣に伴う苦痛の軽減に對して、医学が必ずしも有効ではなかった時代である。そうした中、医師に頼らず健康を獲得するための様々な健康論や代替医療が発明、紹介された。ヨーロッパ由来のホメオパシー、水治療、アメリカ生まれのトムソン主義やグラハム主義などが挙げられる他、モルモン教やアドヴェンティスト派、キリスト教科学といった、この時代の新宗教にも、健康への高い関心は反映されている。

アメリカ合衆国の主流を為しつつあった福音主義プロテスタントの人々にとって、プロテスタント信仰の枠をはみ出す新奇な宗教論を伴う健康論は簡単には受け入れられないものだったはずである。しかし、健康が善かつ自然の状態であり、自然の法則を学んで実践することではそれは獲得される、という、科学的、非科学的を問わず、当時の健康論一般に共通した考え方は、啓蒙主義の影響を受けた同時代のプロテスタント信仰とも馴じみがよいものであった。十九世紀のアメリカ人は、時には正統的福音派プロテスタント信仰の枠内にとどまりつつ、またある場合には、ユニテリアンなど、啓蒙主義の影響をより強く